

Asia Indicators

発表日: 2024年2月16日(金)

オーストラリアの雇用環境に変調の兆し(Asia Weekly(2/12~2/16))

~インドのインフレ率は中銀目標で推移も、依然インフレ圧力がくすぶる状況が続く~

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹(Tel:050-5474-7495)

○経済指標の振り返り

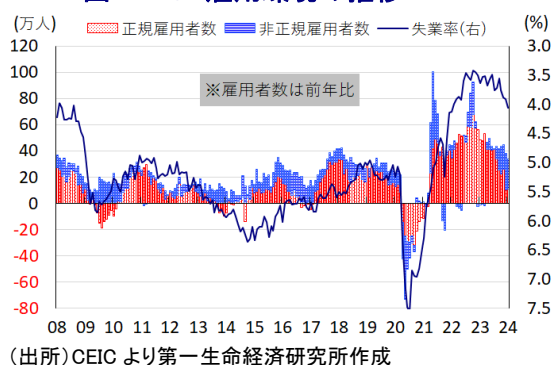
発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
2/12(月)	(インド)12月鉱工業生産(前年比)	+3.8%	+2.4%	+2.4%
	1月消費者物価(前年比)	+5.10%	+5.09%	+5.69%
2/15(木)	(オーストラリア)1月失業率(季調済)	4.1%	4.0%	3.9%
	(インドネシア)1月輸出(前年比)	▲8.06%	▲2.70%	▲5.85%
	1月輸入(前年比)	+0.36%	+1.30%	▲3.81%
	(フィリピン)12月海外送金(前年比)	+3.8%	--	+2.8%
	金融政策委員会(政策金利)	6.50%	6.50%	6.50%
2/16(金)	(韓国)1月失業率(季調済)	3.0%	--	3.2%
	(シンガポール)1月非石油輸出(前年比)	+16.8%	+5.4%	▲1.5%
	(マレーシア)10-12月実質GDP(前年比・改定値)	+3.0%	+3.4%	+3.3%*

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。*は速報値

[オーストラリア]~大都市部を中心に雇用は頭打ちの様相を強めるなど、雇用を取り巻く環境に変化の兆し~

15日に発表された1月の失業率(季調済)は4.1%となり、前月(3.9%)から0.2pt悪化している。失業者数は前月比+2.2万人と4ヶ月連続で拡大している上、前月(同+0.1万人)からペースが加速しているほか、雇用形態別では非正規雇用に対する求職者数(同▲0.2万人)は減少している一方で正規雇用に対する求職者数(同+2.5万人)の拡大の動きが全体を押し上げており、中期的な基調も拡大傾向を強めている。一方の雇用者数は前月比+0.0万人と前月(同▲6.3万人)から減少の動きに一服感が出ており、雇用形態別では非正規雇用者数(同▲1.1万人)が減少する一方で正規雇用者数(同+1.1万人)の拡大の動きが減少の動きを相殺している。ただし、中期的な基調としては雇用者数の拡大の動きが鈍化するなど頭打ちの様相を強めている。地域別では、最大都市のシドニーを擁するニュー・サウス・ウェールズ州や第2の都市メルボルンを擁するヴィクトリア州など大都市部を中心に調整の動きを強めている様子が確認されており、急速に雇用を取り巻く環境が厳しさを増している。なお、労働力人口は前月比+2.3万人と前月(同▲6.1万人)から2ヶ月ぶりの拡大に転じるなど一進一退の動きをみせており、労働参加率は66.8%と前月(66.8%)から横這いで推移しているものの、中期的な基調は頭打ちの兆しがうかがえるなど労働市場を取り巻く環境が変化しつつある様子がうかがえる。

図1 AU 雇用環境の推移

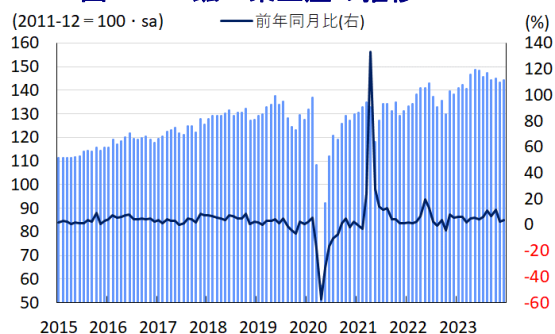


[インド]～生産活動は一進一退の一方、インフレは鈍化するも幅広くインフレ圧力がくすぶる状況は続いている～

12日に発表された12月の鉱工業生産は前年同月比+3.8%となり、前月（同+2.4%）から伸びが加速している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月ぶりの拡大に転じるなど一進一退の動きをみせている。商品市況が調整の動きを強めていることを受けて鉱業部門の生産に下押し圧力が掛かる動きがみられるほか、経済活動の動向に連動しやすい発電量も下振れする展開が続いている一方、製造業の生産に底打ち感が出ていることが生産全体を下支えしている。消費財関連の生産は堅調な推移をみせているほか、年度末が近付いていることを反映してインフラ関連の生産にも底打ち感が出ているものの、資本財関連や中間財関連の生産は弱含む動きが確認されるなど、先行きの生産活動に不透明感がくすぶる状況が続いている。

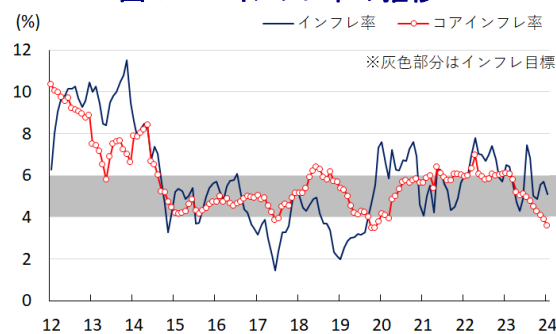
また、同日に発表された1月の消費者物価は前年同月比+5.10%となり、前月（同+5.69%）から伸びが鈍化している。前月比も▲0.11%と前月（同▲0.32%）から2ヶ月連続で下落しており、国際原油価格に底打ち感が出ていることを反映してエネルギー価格は上昇している一方、穀物や一部の生鮮品で物価上昇の動きが続くも多くの食品で物価が下振れしていることを受けて食料品価格に下押し圧力が掛かる展開が続くなど、生活必需品を巡る物価の動きはまちまちの様相をみせる。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+3.59%と前月（同+3.89%）から伸びが鈍化しており、2ヶ月連続で中銀（インド準備銀行）が定めるインフレ目標（4～6%）の下限を下回る推移が続いている。ただし、前月比は+0.25%と前月（同+0.05%）から上昇ペースが加速しており、エネルギー価格の上昇を反映して輸送コストに押し上げ圧力が掛かるとともに、国際金融市場におけるルピー安を受けた輸入インフレ圧力の高まりを反映して幅広く財価格が押し上げられているほか、サービス物価にも上昇圧力が掛かるなど、幅広くインフレ圧力が強まる動きがみられる。

図2 IN 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図3 IN インフレ率の推移

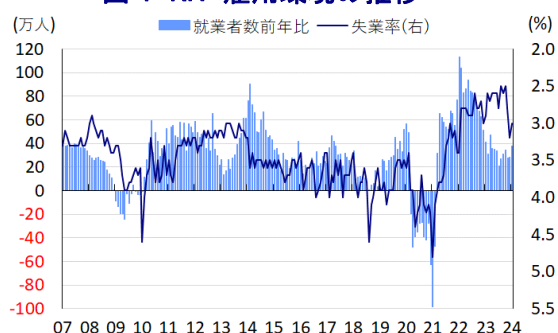


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[韓国]～高齢層の非正規雇用者を中心に雇用拡大の動きが続く一方、若年層の雇用環境は依然として厳しい～

16日に発表された1月の失業率(季調済)は3.0%となり、前月(3.2%)から0.2pt改善している。失業者数は前月比▲4.1万人と前月(同+12.1万人)から3ヶ月ぶりの減少に転じており、年代別では60代以上の高齢層のほか、40代や50代を中心に減少する動きがみられる一方、20代や30代で拡大する動きがみられるなど対照的な状況にある上、中期的な基調は拡大傾向で推移している。一方の雇用者数は前月比+8.2万人と前月(同+1.1万人)から2ヶ月連続で拡大しており、年代別では若年層で力強さを欠く動きが続いているほか、40代で減少する動きがみられる一方、50代や60代以上の高齢層を中心に拡大の動きを強めている。雇用形態別でも正規雇用者数が減少している一方、非正規雇用者数が大幅に拡大する動きが確認されており、足下の雇用は高齢者の非正規雇用者を中心に拡大している様子が見え始める。労働力人口は前月比+0.4万人と前月(同+1.3万人)から5ヶ月連続で拡大するなど労働市場への参加意欲は堅調に推移しているものの、年代別では50代や60代以上の高齢層が中心である一方、若年層を取り巻く雇用環境は依然として厳しい状況が続いていると捉えられる。

図4 KR 雇用環境の推移



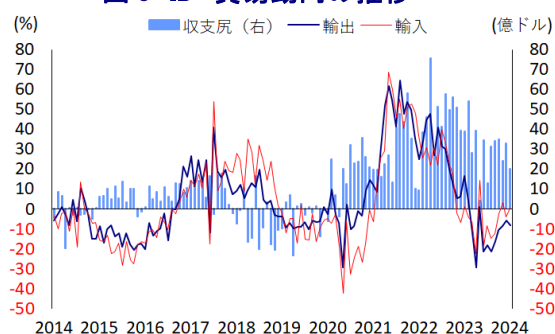
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[インドネシア]～世界経済の減速や商品市況の低迷を受け、輸出は頭打ちの動きを強める展開が続いている～

15日に発表された1月の輸出額は前年同月比▲8.06%と8ヶ月連続で前年を下回る伸びで推移しており、前月(同▲5.85%)からマイナス幅も拡大している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月ぶりの減少に転じるなど一進一退の動きをみせているほか、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちの動きを強めている。農作物関連の輸出に堅調な動きがみられるものの、原油価格が調整の動きを強めていることを反映して原油や天然ガス関連の輸出額に下押し圧力が掛かるとともに、

鉱物資源関連の輸出も鈍化している上、製造業関連の輸出も頭打ちの動きを強めるなど幅広く鈍化している。一方の輸入額は前年同月比+0.36%となり、前月（同▲3.81%）から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も3ヶ月ぶりの拡大に転じるなど底打ちの動きがみられるものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちの流れを大きく変えるには至っていない。原油や天然ガス関連の輸入額に下押し圧力が掛かる動きがみられる一方、機械製品関連をはじめとする製造業関連の輸入の堅調さが全体を押し上げている。結果、貿易収支は+20.15億ドルと前月（+32.85億ドル）から黒字幅が縮小している。

図5 ID 貿易動向の推移

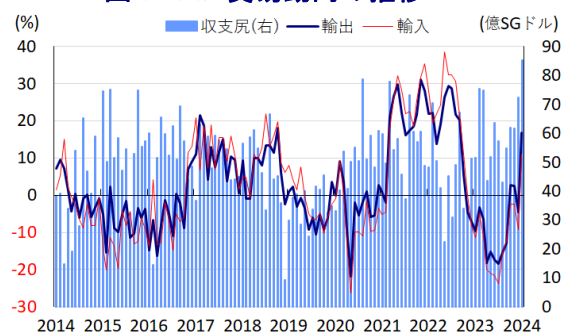


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[シンガポール]～輸出は底堅い動きをみせるなか、1月の貿易黒字は月次ベースで過去最高水準を更新～

16日に発表された1月の非石油輸出額は前年同月比+16.8%となり、前月（同▲1.5%）から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も+2.26%と前月（同▲1.69%）から2ヶ月ぶりの拡大に転じるなど一進一退の動きをみせているものの、中期的な基調は拡大傾向で推移するなど底型動きをみせている。主力の輸出財である電動バルブなどの電気機械関連のほか、半導体をはじめとする電子部品関連、化学製品関連の輸出の堅調さが輸出全体を押し上げる動きが続いている。石油関連を併せた総輸出額も前年同月比+16.7%となり、前月（同▲4.6%）から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も+5.4%と前月（同▲2.9%）から3ヶ月ぶりの拡大に転じており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きが続いている。一方の輸入額は前年同月比+11.1%となり、前月（同▲9.3%）から15ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も+5.2%と前月（同▲5.5%）から3ヶ月ぶりの拡大に転じるなど底打ちの動きがうかがえるものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど力強さを欠く推移が続いている。原油をはじめとする鉱物資源関連の輸入額が拡大する動きがみられる一方、製造業関連の輸入は弱含む対照的な動きがみられる。結果、貿易収支は+85.34億SGドルと前月（+72.22億SGドル）から黒字幅が拡大して月次ベースの黒字幅は過去最大となっている。

図6 SG 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。